



碧南ロータリークラブ週報

第2318回例会 平成18年6月14日(水)

●会長 岡田 超勇 ●幹事 亀山 裕一 ●SAA 長田 豊治

■例会日 毎週水曜日 12:30 ■例会場 碧南商工会議所ホール

■事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90

TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100

ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>

E-mail: info@hekinan-rc.jp

■会報委員 杉浦昌裕・角谷信二・清澤聰之・岡本明弘

超我の奉仕



2005~2006年度

国際ロータリーのテーマ

● 齊唱

ロータリーソング「我らの生業」

● 本日のメニュー

和風弁当 大正館

● 本日のお客様

西尾ロータリークラブ 杉浦義夫君

高浜ロータリークラブ 深谷幸則君

碧南市文化振興課 学芸員 浅野泰子様



岡田超勇会長



杉浦健次会長エレクト 浅野泰子様

会長挨拶

先週の理事会におきまして、インドネシアジャワ島の地震に対する義捐金を満場一致でださせて頂くことになりました。今日、杉浦国際奉仕委員長さんと私と亀山幹事の3人で碧南市の社会福祉協議会に出向きました、そこを通じまして日本赤十字社へ寄付をさせて頂きました。皆様方のご協力に感謝致します。

次に、サッカーワールドカップが開催されております。大変関心をもち、期待をもって観させて頂きました。オーストラリア戦は、終盤の10分足らずで3点も入れられて負けてしまいました。大変残念でした。それでも、まだ残りの試合がありますので日本の選手には是非頑張って頂きたいと思います。

次に、6月13日に杉浦ガバナー補佐主催の本年度最後の会長・幹事会が開催されました。そこで、「一年間を振り返って」ということで、皆さんから話を聞くことになりました。知立クラブと西尾KIRARAクラブは、本年度15周年ということで、いろいろな事業をさせて頂きましたという話がありました。碧南も、そろそろ50周年のことを考えなくてはいけないのかと思いました。また、刈谷クラブの岡本会長は、当初目標として女性会員を入れたいと言ってみました。一年を過ぎて実際に2名入会され、次年度も2名入会されるとのことでした。刈谷も古かったそうで、最初はいろいろな意味で抵抗があったのではないかとお察ししています。また、来年IMも復活するということで、是非刈谷の方へ来て下さいというお願いもありました。

幹事報告

- ・先週開催の第12回(47-12)理事会報告及び他クラブの例会変更等は別紙幹事報告の通りです。
- ・先ほど会長挨拶の中でも話があり、別紙幹事報告の理事会報告にも記載しておりますインドネ

シア地震に対する義捐金拠出について補足説明を致します。従来こうした災害義捐金は地区よりの要請により地区経由で拠出していましたが今回の件については大災害にもかかわらず地区からは何の連絡もなく、地区事務所へ問い合わせをしても年度末のためか明確な回答がありませんでした。今年度は昨年9月にカトリーナ・ハリケーンで1回拠出していますがまだ予算枠があるため理事会の意見交換でお諮りしたところ、当クラブ独自でも拠出すべきというご意見があり、急遽協議事項に切り替えて審議した結果全会一致で会員1名当たり千円、7万7千円を拠出する事に決定致しました。その後RJにもメールで問い合わせをしましたがRC関係の拠出先の回答が無かったため今回は当市社会福祉協議会を通じて日本赤十字社に寄託する事に致しました。

インドネシア地震義捐金を、社会福祉協議会杉浦直勝会長にお渡しする岡田赳勇会長、杉浦勝典国際奉仕委員長
(於 碧南市社会福祉協議会事務所)



亀山裕一幹事



委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数 77名 (内出席免除者 14名) 出席者 64名	
出席対象者 57／63名	出席率 90.48%
欠席者13名(病欠者0名)	前々回修正出席率 98.41%

〈ニコボックス委員会〉

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

- 井上 達夫君 亀山幹事には幹事報告4分間情報でロータリー財団について沢山ニュースを提供していただき、有り難うございます。
- 平岩統一郎君 「無我苑」で、現代クロアチアアート展（版画）を開催しています。時間が有ればぜひ、お遊び下さい。
- 杉浦 勝典君 6月11日日曜日千福斎宮社のあじさい祭りが行われました。広報へきなんと中日新聞の記事のおかげで、市内を始め市外からも大勢の人達がお見えになり、盛大に行うことが出来ました。最初はRCクラブの緑化推進の寄付金が基で、大きく成長出来ました。有り難うございました。
- 犬塚 敦統君 長い間休ませて頂き有り難うございます。
- 鈴木 輝彦君 岡崎信用金庫様の調査月報6月号にて企業訪問シリーズに弊社が8ページにわたり紹介されました。
- 石橋 嘉彦君 去る6月8日全国中小建設業協会総会に於いて会長表彰を戴きました。
- 竹中 誠君 6月11日（日）碧南高等学校同窓会第54回定期総会、無事に終わりました。
皆様方に大変お世話になりました。

卓話

「フェウザン会の画家たちと初期の藤井達吉」

碧南市文化振興課 学芸員 浅野泰子様

私は、3月末に碧南市に引越ししてきました、4月から学芸員として碧南市文化振興課に所属しております。引越し前は、東京都西東京市に住んでおりました。碧南市の良いところは幾つもありますが、一番は、皆さんが人情味をもってみえることだと思います。それから空の広いのも気に入っています。

ではここで、学芸員とは何かという説明をします。日本で美術館や博



浅野泰子様

物館を設立し運営していくにはクリアーしなくてはならない法律があれこれあります。なかでも重要なのは昭和26年の博物館法です。この法律の第四条の3では、博物館に専門的職員として学芸員を置く。第四条の4では、学芸員は、博物館の資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関係する事業についての専門的事項をつかさどると、規定されています。学芸員の資格を得るにも、この法律で定められた単位を大学で取得する必要があります。学芸員資格を得る単位そのものはさほど数は多くなく、従って資格を持っている人は大勢います。けれども実際に美術館や博物館に働くには美術史や美術を専門に勉強した者ではなければ難しく、学芸員募集の際にこの資格以外の各種要件を加える美術館も少なくありません。碧南市では、旧商工会議所の建物を改修して美術館にする計画が進んでいますが、美術館として登録するため文化庁に図面等を提出しております。ともあれ美術館学芸員は、絵画や彫刻などの美術作品を収集し、それらの作品がいたまないよう保管して、状況に応じて修復の手配をします。どんな展示を行うかの企画をたて、教育布教のため各種講座を行ったりもします。碧南市にいるものとしては、皆様のお力も借りながら市民の方々に喜んで頂ける美術館になるよう努力したいと思っております。

ではここでフュウザン会についての話に入ります。フュウザン会は大正元年に結成された前衛美術のグループです。この起りは画家の齊藤予里が自分の個展を開こうと銀座の読売新聞社3階のスペースを借りたことにあります。そこに、岸田劉生、清宮彬がやってきてスペースの一部を使えないかと言ったため、双方の友人達に声をかけてフュウザン会を結成し展覧会を開くことが決まりました。第一回フュウザン会展覧会は、大正元年10月15日から11月3日まで開催され、翌年3月には第二回展覧会が開催されました。この会は、20歳代の青年達を中心とする新進芸術家達が新しい芸術を生もうとの情熱のもとに集まった会であり、第二回展覧会を開催した後解散となりました。このように短命な会ながら今日でも高い注目度を誇っている理由は、この会が、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンなど、いわゆる後期印象派の影響を明らかにしたもの達による最初の展覧会であったことがあります。また、この会は新しい芸術を求め、創造しようとする青年達の熱気に満ち、個人の自由な表現を重視した、まさに大正という時代を反映しているという点でも見逃せません。ちなみに会の名前フュウザンとは、フランス語で木炭をさす言葉です。木炭は画家や彫刻家がデッサンに必要な道具です。



フュウザン会は当時大きな注目をあびていました。そのきっかけは二つあります。一つは、第一回展覧会の会期が第六回文部省美術展覧会と時期を同じくしていたことです。文部省美術展覧会は、かなりの権威をもっていた官設の公募展ですが、六回の大正元年頃には芸術家ばかりではなく、一般の興味も引くようになっていましたが、反面新鮮さが減っていました。それ故ちょうど同じ時期に開かれたフュウザン会の展覧会に注目が集まりました。また、もう一つの理由に会場を提供した読売新聞がフュウザン会を記事に取上げたことがあります。その結果、フュウザン会の第一回展覧会は革新的青年作家達による美術の革新運動として認識されるようになります。およそ90年たった現在では、その後の大正期、さらには昭和初期の前衛的作品群を見るうえで重要な節目となった展覧会と位置づけることができます。

第一回フュウザン会展覧会に出品した作家は、33名、作品総数は168点でした。メンバーには、高村光太郎、萬鉄五郎、岸田劉生など、現在でもよく知られた画家や彫刻家が含まれています。そして、碧南市とこれからできる碧南市の美術館にとって重要なのは藤井達吉が参加している事実です。33名の中では唯一の工芸家です。ご承知のように藤井達吉は、明治38年に上京し、近代工芸をリードしていました。当時の新進芸術家の一人である津田清風と付き合いがあったことや、高村光太郎が開いた画廊に何度も作品をだしたことなど分かっていることも少なくありません。

いずれにしても、フュウザン会の友人関係に基づいた集まりだったことを考えると、達吉もまた気鋭の作家として他のメンバー達の交友が相当あったことには間違いないと思います。

フュウザン会と達吉との関わりや同時代の人達の評価などは残された資料から少しづつ拾えます。けれども細かい点では不明の部分も少なくありません。フュウザン会結成のきっかけを作った、齊藤予里と岸田劉生はフュウザン会解散後別の道を歩みます。岸田劉生は、大正4年に草土社を結成します。一方の齊藤予里は、大正5年に日本美術家協会を立ち上げています。そして達吉は、日本美術家協会の発起人として名を連ねているのです。この会は、何らかの主義主張によってというより自由に作品を発表する場として設けられたようで、その分、記録類が少なくなっています。もし、齊藤予里と達吉の関係を示す資料などがあれば、当時の達吉がどのように考え、行動したのかの詳しい把握ができるようになります。もちろん達吉が、東京時代のことを回顧した文章などもありますが、客観的な資料を探索し研究する必要もあると思います。また、残された作品をよく観察して、その特質を読み取り藤井達吉の日本の工芸における役割を明らかにしたいと思います。

再来年4月にオープンする予定の碧南市の美術館のはしらの一つは、藤井達吉です。今後、達吉の生まれ故郷でもある碧南の方々のお知恵をお借りすることもあるうかと思いますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。ご清聴、ありがとうございました。



次回例会案内 平成18年7月5日（水）
クラブフォーラム 役員挨拶